KSKQ

イマージュ

2011年9月

1991年9月3日　第三種郵便物承認　毎月（1・2・3・4・5・6・7・8の日）発行

態変身体表現の転換点

「無」をテーマに態変の抽象身体表現の地平を広げる

喰うという極めて抽象的なテーマの元で、態変の抽象身体表現を自在に展開し、無の表現を取り込んで行く実験的な取り組みを行ないます。今回、各分野の第一線で活躍する、音楽家の伊東乾氏、彫刻家の塚脇淳氏の両名を迎えられることになりました。伊東氏のピアノの生演奏、塚脇氏の巨大鉄美術との対峙を通して、態変の抽象身体表現が、確かな現実感を掴み出し、未来を拓く一助となれば幸いです。

喰　　う

作・演出　金満里

2011年　10月14日（金）　19：30
15日（土）　15：00
16日（日）　14：00

AI・HALL（JR伊丹駅下車すぐ）

刹那的瞬間に起こる身体の革命

生命感溢れる劇団態変の身体表現だといえる。
しかしそれは、死を内包する身障者の身体だからこそ、逆から来る命そのものが宿っている、からだと思う。

『喰う』という貪欲で生々しいタイトルを今回選んだのは、そういった態変の生と死の狭間の身体表現でこそ、
死の側から『喰う』を表現していきたいと思うからである。

未来へ対し展望の描けない時代に来て、食うをめぐり熾烈な人間エゴが潜在化するし、既に顕在化もしている。
食物の争奪戦に生き残れないだろう、我々障害者側からの恐怖が実は底流にありながらこその、無欲に死に近い「喰う」があっても良いのではないか、
というもう一つのリアリティーを私は持っている。
それは空想での空を、色即是空の喰うを空とするような、無なる存在へ近づきたいとする願望と共にあるものとして。

止むに止まれぬ追い詰められた者の、返っての優雅さでもって、食わない『喰う』の表現があっても良いのではないか、
と現在的危機感を未来へ放つものにかえ提示する夢想がここにはあるものとして。

　私が観たい、態変の身体としてある刹那を、「喰う」に乗せて象徴的に描けたらと、あまり難しく考えず楽しんで作っている。
きっとこの一時、私たちに身を委ね、一緒に揺られどこまでも行ってしまいたい衝動に観たあなたも駆られ、一緒に行けるだろうとほくそ笑む楽しい日々である。

金満里

喰う・・・世界が変わる瞬間への誘い

伊東　乾

ピアノは　鍵盤上での　手の舞い

こんな風に言うと意外に思うかもしれない。
でも、奏者にとっては、演奏する音だけが音楽ではないのだ。
手の、いや手だけではない、上腕から肩、さらには腰、重心総て、己の全身全霊をもって
また、それをむなしくしながら、
私たちは深さ１センチほどの鍵盤を一つ一つ押す。それをピアノのタッチという。

押すだけではない。指を上げる、あるいは押さないのも大切な「演奏」だ。
むしろ演奏しない音に、あるいは響きを止めることに、私たちは多くの心を砕く。
一つのキーを押したとき、ピアニストの指は鍵盤上で完全に安らいでいなければならない。
また、打鍵していない指たちもリラックスしている必要がある。そうすることで、
つまり、安らぎのうちに沈黙を創りだすことで、次の響きが豊かに生み出されてくる。
そんな、呼応する演奏の身体と響きの関係が、僕の音楽では、本質的な役割を演じる。
そんな、響きと沈黙を「舞う」鍵盤上での手の舞踏。
そこに「聴こえる音楽」と「聴こえない音楽」がある。
指の第一関節の先、たった１センチほどの動きの中に、
腕の芯から肩、背中、腰の中心まで自分の存在のすべて、その意識と重さが関わっている。

指先１センチの動きで、世界のすべてを変える。
そう信じ、実際にそれを響かせる、それがピアノを弾くという事だ、と
かつて「手の舞い」を教えてくれたのは、高橋悠治だった。
そんな鍵盤の手の舞いと、舞踏する身体との交錯。僕の最初の挑戦は1999年1月27日
大野一雄、一柳慧、磯崎新の３人とのセッションだった。
二度目の挑戦は、2007年4月28日、金満里のソロと静岡でセッションした。
さらに４年の年月が流れ、いま「悲変」と「喰う」の演奏を準備している。

考えてみれば「喰う」という行為も、極微の運動で世界が変わる。
もしあなたが猛獣に喰われるとしたら、ケモノのあごの数センチの動きが
あなたという存在を違うものに噛み砕いてゆくのを、身をもって経験する事になる。
そういえば、インドの王子が飢えたトラに身を与えるという説話もあった。

「喰う」の時間と空間は、そんな世界の変化への扉を開こうとしている。
といっても別段、巨獣に喰われる心配はない。物事は至って穏やかに進むだろう。
そこに居合わせる人は、特権的な身体と感応しあう僕の作品を聴くかもしれない。
あるいはそれがベートーヴェンやショパン、ドビュッシーの仕事の形を取って、響くこともあるだろう。
だが誰が書いた音楽か、という程度のことは、実はたいした問題ではない。
大切なのは、たった指先１センチ、極微の動きにだけによって、
世界と、そこにある存在、すべてがひっくり返ってしまう、
二度と繰り返すことのできない、そのつど一度きり、一期一会の瞬間に、
あなたが立ち会い、証人としてすべてを視届け、すべてを聴き届けることができる、
そのことに尽きている。

（いとうけん　作曲家・指揮者）

態変と鉄美術 必然の出逢い

――鉄美術ルポ――

7月22日

今作のイメージを芒洋とふくらませていた5月の段階で、金満里は、鉄美術でしかも巨大な物を舞台上に上げたいという構想を持ち始めていた。そこで我々は鉄美術作家を探す努力を続けてきたが難航していた。

ところが偶然の出逢いがあるもので、金満里がいつもの身支度の最中、洗面器の下に敷く新聞を片付けようとしていた時のこと。普段だったら、そのまま捨ててしまう新聞になぜだか虫の知らせが走り「裏も見せて」と。すると、そこに以下の記事があった。

"鉄をたたいて30年、彫刻家「塚脇淳展」感覚で空間鍛え上げ"（毎日新聞7／20夕刊）

掲載写真のシンプルな直線と曲線で構成された鉄美術作品にピピっときた金満里は直ぐさまその個展会場に電話、すぐにでもお会いしたいのですが、お話させていただけませんか。すると、ちょうどその日に塚脇氏がギャラリーに来るという偶然の幸運。その夕方にさっそく返しの電話があり、塚脇さん自身も興味を持っているとの嬉しい報せ。善は急げということで、翌日の午後に面会のアポイントを取った。

7日23日

個展会場の神戸のギャラリーへ。前夜に個展祝賀パーティーだった塚脇さんは約束の時間に少し遅れて到着、ハンカチで汗を拭く塚脇さんに早速今回の作品のイメージを伝える。今回の作品と劇団態変の表現について15分ばかりのプレゼンをさせていただく。すると、塚脇さんから、今聞いた話にぴったりとイメージが合うものがあると。それは自身の初期の作品なのだが、話を聞けば聞く程、今回の作品にぴったりでそれしかないと、自信満々の様子。金さんのイメージに合うかどうかが問題なのだが、今からでも見に行きませんか?と。その作品は解体した状態で神戸大学の塚脇さんの研究室に置いてあるとのことで、さっそく神戸大学へ向かうことになる。

車中、鉄美術作家を探していたが中々見つからなかったという話をすると、関東には沢山いるが、関西にはご自身も含めて僅かしかいないのだそう。

「世間一般では、神戸はファッションの街というイメージが強いが、僕に言わせれば神戸は鉄の街なんです。古くから小さい街の鉄工所が沢山あり、工業の下支えをしてきた。そういう街なんです。だから、僕はもっと神戸のそういう部分を多くの人にアピールしたい。"鉄の街神戸"と題した展覧会なども開いたことがある。」というような話しをしているうちに神戸大学に到着。校舎の裏手に鉄美術の部品が一山積まれている。ノートに組み立てた時の形を書いて説明してくれる。組み立てると高さ2.3ｍ、横幅6.4ｍの巨大な作品になる。外に保管されているため錆ついてはいるが、本番に向けて磨けば黒くなり、また生まれ変わるとのこと。金満里も実物を見て、確信を持って「これが良いです。」

このように話は纏まった。自分の初期の作品が舞台美術として再登場というシチュエーションに塚脇さんは興奮した様子で、しきりに「完璧だ…」と。

8月11日

役者がぶら下がるという動きをしても、美術の安定性がどれだけあるのか、ということを確かめたくて、二週間後にもう一度鉄美術を見せてもらいに神戸へ。

すると、なんと塚脇さんは、舞台上でどのようになるのかのイメージが持てるようにとの配慮で、巨大な作品を組み上げた状態で待っていてくれた。舞台上に設置する位置と向きについて相談すると、塚脇さんからイメージが出され、この美術は舞台と観客の空気を驚くという役割を果たしてほしい。そのため、カーブした方に役者が入る格好になると牢獄のようになってしまい、舞台と観客の空気を遮断してしまうのではないかと懸念している。ということが伝えられる。これは納得のいく提案であり、舞台と観客を驚く空気の流れを作れるような配置にすることで一致した。

どんな作品が舞台上に姿を現すのか、それは10月14日までのお楽しみ！

役者対談

下村雅哉 × 愛澤咲月

喰うへの入り口

下村　初めて劇団態変の舞台に立ったのはエキストラだった。はっきり言って何をやっているのか解らなかった。一年後、観客で見たが、「観るよりやった方がいい」と思い、始めは金満里身体芸術研究所に通った。

これまで出演してきたのは『男は旅に出た』シリーズでずっと物語性のある作品だった。4年目で初めて物語性の無い作品で、戸惑う反面、面白味がある。「自由に動いてもいいんやなぁ」っていう開放感。反面、「何やってるんや?」って思われたらどうしようっていう怖さがある。

愛澤　私は難波の『ファン・ウンド潜伏記』のエキストラがデビューで、2度目の今回は役者として出ます。私も今回のような舞台は初めてなので、どうイメージすればいいのかもわからなくて、「すごく取っ付きにくいな」と。今もちょっと戸惑ってる。

今回、身体を動かす稽古に入る前に、皆でキーワードを紙に書き出していくワークショップをしたでしょ、「無」とか「空」とか。私はイメージが全く浮かんで来なくて。その日以降、「固形物」とか、「平常心」とか、今回の作品に関連するキーワードを常に考えるようにしたんですけど、それも抽象的で難しくて、稽古で出る言葉が全然理解出来なかったんです。ある日の稽古で金さんが「あ、その脚がいい!」って言ってくれたことがあったんです。「わたし今、どんな足してんのやろ?」と思って、ふと自分の脚を見たら、すごい曲がってたんですよ。自分でもギョッとして、「気持ち悪!」って思ってしまうぐらいでした。今までそれは諦性マヒのせいだと捉えずに、「何でこんなんなんやろ、嫌やわぁ」って、ただの癖としか見てこなかったから。でも「ああ、この舞台に、この身体のこの形の、私の嫌いなこの脚の曲がり方が必要なんだな。これが表現なんだ」と思ったときに、「私、この芝居に入っていけるかも知れへん。」と思ったんです。この時、27歳にして初めて自分の身体と向き合ったというか。態変の表現って、ストーリーがなくてもできる、こういう舞台なんだと、自分の中にストンと染み込んできた感じがしました。

下村　それって大きいね。そういう何か一つがきっかけになることがある。

愛澤　ストーリーもないし、台本って存在するの?とか、ただ言われるがままに動いてるだけでちっとも楽しくなくて、筋肉痛にばっかりなるわ（笑）って思って、「全然わからへん、何もわからへん、面白くない」って思い詰めてました。たぶんあれが無かったら、私、態変の芝居を辞めてたかもしれない。一つ一つの動きを考えながらというより、全部私の身体にしかできへん動きやし、健常者だったらこの脚のこんな曲がり方はきっとできへんやろうな、自然な身体を受け入れるっていうのは、態変の舞台表現に一番必要なことなんだなと思いました。

『喰う』のイメージ

下村　（僕が、『喰う』に持つイメージは）やっぱり、「孤独」。僕は今、一人暮らしをしてるけど、だんだん（障害が）重くなってきて、何かあった時に誰にも見つからなかったら、あの世往きやと思ってる。僕には年に1回か2回大きいてんかんがあるねん。夜中に起きるんやけど、変な話、寝て1時間後に目が開いたら怖くなる。そういう時は1時間後くらいにおこることが多いから。（そういう時は、舌を噛まないように口に突っ込むものとして）舌噛まんようにタオルをくわえるねん。今年はもう（てんかんが）あったから、もうこれ以上は無いかなって思うけど…

愛澤　そういうリスクを背負いながら、一人暮らししてはるのってすごいなって思いますけど。

下村　「一人暮らしって、何を考えてるんや」って、そこを一番反対された。（一人暮らしを始めて）もうかれこれ15年になる。今は脚とかが悪い（障害が重度化してる）から布団からベッドに変えて座るようにして何とかやってる。一回床に転けてしまったら一人で立つのはなかなか難しいから、トイレに行く時とか、転けないようにいつも気にしてる。

『喰う』の稽古風景

下村　今回、黒子が上下（かみしも）の舞台袖から、生の声でいろいろな言葉を言うシーンがあるね。

愛澤　私たち（役者）は、コロコロと（舞台）真ん中に転がって行くんですけど…。最後は踏まれてベチャッとなる。普通、食べ物は口から胃に行くけど、その逆で胃から出てくるというイメージが演出家の金さんから出てましたね。次のシーンでは、便もある。その場面はまだやってないけど楽しみです。食べるところだけじゃなくて、出すところまで表現するのかと思ったら、何かワクワクします! 私たちは、食べて排泄するという行為を何気なく一生やり続けるんですよね。それをあえて表現するっていうのが面白いなぁ。

下村　「当たり前のことを当たり前にやる」のが一番難しいね。

僕は態変に「破壊」のイメージを持ってる。固定観念をバアーッとはねのけるような。

愛澤　「破壊」といえば、「ガラスの城」のシーンがありますね。（二人の）間がガラスで隔絶された世界。そのガラスがあるきっかけで割れて、ごちゃまぜになる。割れる瞬間を、身体で表現するんですよ。割れるのは早くても遅くてもダメで、やるたびに「難しいな」って思って、一番私の頭を悩ませるシーンです。でも、動きが決まってない分、私の中ではそのシーンが一番楽しみでもあるんです。

下村　このシーンは、無いものをあるように見せなあかんから。（パントマイムみたいに）手でこうしたら具体的になるからあかんねん。

昨日までのパターンが今日は全然違うものになるかもって。（小泉）ゆうすけが言ってたな。日常って本来そういうものかも。同じくり返しのようで毎日違う。

愛澤　今回は更にピアノとか、鉄美術のオブジェとかも入りますね！衣装も！目、耳、身体全てで役者が楽しめる舞台です。一つ一つを考えると「んー、難しい！」って、頭悩ませるんですけど、でもやっぱりワクワクします。

下村　場面転換を一瞬にして変える、時間的にスリリングな場面もある。『喰う』って、実際に喰うってことによって細胞が生き返るとか、身体の中の世界みたいなこともあるだろうけど、大きな宇宙を描いてるようなイメージなんかな？人間の身体だけじゃなくて、もっと総合的なものを描いてそうな気がする。

愛澤　宇宙ってピッタリな気がします。

下村　ほんで、未来志向になったらいいな。（終）

キンジス・ハーンの役者日誌

バカに出来ない夏の”喰うトレ”

新人役者として出演するキンジス・ハーンです。
10月公演まであとわずかの夏の終わり、『天高く“喰う”肥ゆる…』を願いまして、
稽古ではケガと隣り合わせ。無数の小さな打ち身やアザをいかに次の稽古までに持ち越さないか？そればかり考えて生活する中。本番まで残り一ヶ月と迫った現在、日々の食事が一番大事なんちゃうの？とやっと思い立った次第で。
『それが、丈夫じゃない身体で態変に臨む役者の言うことか！』と方々からダメ出しを喰らいそうですが・・・。
今回は”喰うトレ”オススメの食材をご紹介します。

しいたけ（効能：骨強化・脳の機能向上・腸内環境整備）

カリウム、ビタミンB群、食物繊維…栄養素以上に、ダシの取れる旨みが…

旨みのもとはグルタミン酸で、脳の機能向上にはたらく…
参考図書：『アスリートのための食トレー栄養の基本と食事計画』P.149
海老久美子：著　池田書店：発行・2011年3月25日

しいたけは、ビタミンDを中心とした“骨強化”という点で、演技での寝姿勢などで、アバラ・ヒザ・ヒジ・コシの各所を痛めやすい役者にとっては、天然の妙薬とも呼びうる、ありがたい食材なのです。稽古や日常介護でどうしても出来てしまうアザや打ち身などもこれを食べれば早めに治ります。実はキンジス・ハーン、この、しいたけ、とくに水で戻した干し椎茸が、この世で最も大大大嫌いな食材でした（“大”が3つじゃ済まないぐらい）。しかし、友人のＩさんから、私の障害にとても良い食材らしいとお聴きしてから、意を決して（それも泣きながら）食べ続け、強引に好き嫌いをなくしたという経験があります。あの干し椎茸の煮付け（ちらし寿司に乗ってるアレ！）を噛みしめた時のあの独特の甘ったるさと、ツーンと鼻につく香りが、味覚、さらには涙腺をも強襲し、声にならない声と同時に涙がボロボロボロボロ…こうした、涙がちょちょ切れるような“苦行”の末。食べると頭がスッキリして、まさに天然のグルタミン酸の賜物である、しいたけの旨みを認識できるようになったのです。私の障害に絡めて言いますと、進行性筋ジストロフィーの診察は、筋肉が脱力していく障害なのに、整形外科ではなく、脳神経科で行われます。しいたけが筋ジスにはとても良い…というのは、最初に引用している、「グルタミン酸による脳機能向上」のあたりに関係があるような気がします。実際、しいたけを食べると、整体やマッサージなどで、全身の凝りから解放された時に近い、深呼吸をするだけでも心地良いという感覚になる時があります。
ただ、食べられるようにはなりましたが、それじゃ大好きなんか？と聞かれると、『う～ん』って感じなんですけどね…。

〈公演詳細〉

『喰う』　作・演出：金満里

日時　2011年10月　14日(金)　19:30
15日(土)　15:00
16日(日)　14:00
(受付開始は開演の1時間前、開場は30分前)

全席自由・日時指定

料金　【前売】　一般　¥3,000
学生・シルバー　¥2,500
障害者＋介護者ペア　¥5,000
【当日】　¥3,500

会場　AI・HALL
兵庫県伊丹市伊丹2-4-1
◎JR伊丹駅下車すぐ
◇JR大阪駅より宝塚線利用　約15分
◇阪急梅田駅より神戸線塚口乗換伊丹線　約22分

＜チケットご予約案内＞
チケットご予約は劇団悪麦または、アイホールまで
劇団悪麦　電話予約または、インターネット予約が可能です。
電話番号　06-6320-0344
Webチケット予約フォーム
http://www.asahi-net.or.jp/_tj2m-snjy/form/ticket.html

AI・HALL　電話予約のみ　072-782-2000

＜会場・アクセス＞

JR伊丹駅・アイホール周辺グルメMAP

クロスロードカフェ　三軒寺前広場のカフェ。天然木のテーブル、椅子に漆喰の壁、ギャラリーは1ヶ月毎に作品が替わります。人と人、物と人、人と物がクロスするカフェ。

伊丹老松酒造　飲み飽きのしない、淡麗でやや辛口のお酒。

西洋懐石アシャンテ　伊丹の農家で取れる新鮮な野菜や地元のお酒を使い洗練されたフランス料理に和のエッセンスを取り入れた西洋懐石。

長寿蔵レストラン

白雪奈良漬　清酒"白雪"の酒粕でじっくり漬け込んだ奈良漬。

和食 楓我　新鮮な魚介類と野菜に加え大山地鶏や薩摩黒豚等の素材を用いた和食。

豆腐庵さらら　体を内からきれいにしてくれる湯葉、豆腐をつかったヘルシーな料理。

1991年9月3日　第三種郵便物承認　毎月（1・2・3・4・5・6・7・8の日）発行

イマージュのこれまで 2011.1～9

1/13(木)～16(日)　「ファン・ウンド潜伏記」公演　精華小劇場
2/17(木)～22(火)　第7回渡韓・稽古
3/15(火)～27(日)　「ファン・ウンド潜伏記」韓国公演ツアー(第8回渡韓)
3/15(火)　情報誌イマージュvol.50発行
4/1(金)～3(日)　第9回渡韓
4/9(土)　共実会企画　韓国公演お帰りなさいの会
4/16(土)　STOP原発アクションin関西　反原発デモ参加
5/29(日)　共実会企画　韓国公演報告会　十三・セブンシアター
6/11(土)　脱原発100万人アクションの集会参加
7/1(金)～3(日)　第10回渡韓
7/22(金)　宗秋月さんを偲ぶ詩の朗読会　メタモルホール
8/8(月)　国際演劇学会2011『ウリ・オモニ』公演　大阪大学
8/10(水)　情報誌イマージュvol.51発行
8/31(水)～9/8(木)　「ファン・ウンド潜伏記」韓国再演ツアー(第11回渡韓)　ソウル

イマージュのこれから　2011.10～

10/14(金)～16(日)　新作「喰う」公演　伊丹アイホール
11月　情報誌イマージュvol.52発行予定

・月・火・木曜　金満里身体芸術研究所
・金曜　ヘーゲル学習会

KSK 共文化の交差点●イマージュ IMAJU

情報誌イマージュ
2011夏 vol.51

特集『ファン・ウンド潜伏記』韓国2都市公演
対談　趙韓恵浄×金満里　軽やかに国境なき世界に飛翔

重度障害者、ビーナスに糞をくらわす　／パク・チャンウ
重度障害者たちが歴史の中に人生を掴むとき／パク・キョンソク
韓国黒子育成奮戦記　／小山潤
韓国人黒子によるレポート　／ホンジョ　ドンニョン
舞台監督ノート　／堀本修
金満里のページ　固城公演　／金満里
偶然な縁　／パク・キョンワン
劇団態変『ファン・ウンド潜伏記』韓国公演を観て　／池内靖子
あの"どよめき"の意味～ソウルと固城の公演を観て～　／愛沢革
地域レポート　原発事故をめぐる情報戦～関東からの報告～　／木村奈津子
便所が火事だ!～糞尿妄想放言集～　／小泉雲黒斎
劇評　劇団太陽族と岩崎正裕の闘い　／広瀬泰弘

◎年3回発行　定価500円　◎年間購読(3冊)／1000円
◎郵便振替でお申し込み下さい。番号：00920-8-320343　イマージュ宛
◎ご希望の号を「○号から」と明記して下さい。
お問合せ　イマージュ(06-6320-0344)

発行人：関西障害者定期刊行物協会／大阪市天王寺区真田山町2-2　東興ビル4F
編集人：イマージュ　貴田藤介　井上朋子　金満里　仙城真　小泉ゆうすけ　大阪市東淀川区西淡路1-15-15
Tel/fax 06-6320-0344　E-Mail　taihen.japan@gmail.com　HP　http://www.ne.jp/asahi/imaju/taihen/　定価50円